

平城京姫寺出土の二彩・三彩陶器

平城宮跡発掘調査部

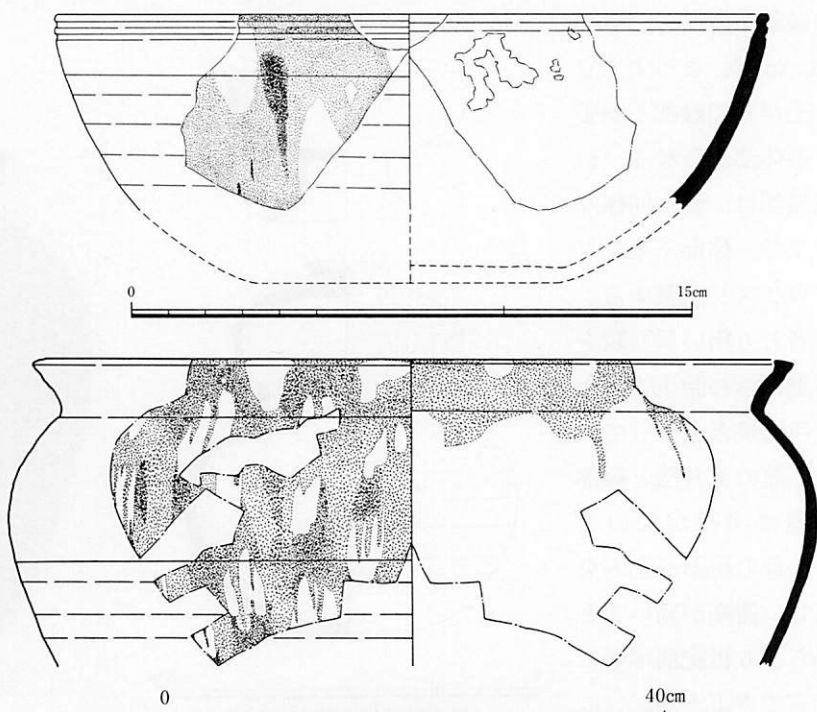
当調査部は、1975年に県営姫寺団地の建設に伴い、平城京の東市周辺東北地域の左京八条三坊九・十・十五・十六坪の発掘調査を行なった。その結果、十五坪では寺院の講堂、僧房の遺構を検出し、ここに一町を寺域として占める姫寺が存在することが明らかとなった。姫寺の創建は、出土した軒瓦から見て7世紀に遡り、廃絶は講堂、僧房の雨落溝出土の土器から、10世紀後半と考えられる。この姫寺とその周辺から、二彩・三彩陶器がまとまって出土し、一部は既に報告している（奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年）。今回、この二彩・三彩陶器を整理する機会を得、極めて珍しい器種を含むことが明らかとなったので、ここに紹介することとする。

講堂、僧房基壇の周辺には瓦を敷いた面があり、この瓦敷上から二彩・三彩陶器が出土している。その器種は、講堂出土のものは二彩多口瓶、二彩甕C、二彩火舎、僧房出土のものは二彩杯もしくは碗である。2は講堂出土の甕Cで、器形を復原できるものとしてはおそらく日本で唯一の出土例であり、特に注目される。これは、須恵器甕Cの器形をそのまま写したもので、口縁部から胴部上半が残存し、それ以下は欠失している。復原口径は約60cmあり、日本最大の二彩陶器である。軟陶で、釉は、残存部に関しては内外面ともに施し、外面と口縁端部、口縁部内面は緑釉と白釉を鹿の子状に施釉し、胴部内面には白釉のみを施釉する。緑釉には、部分的に濃淡がある。胴部下半はロクロ削りを行ない、それ以外はロクロなどで調整する。なお、図示は省略するが、多口瓶は子口頸部、火舎は脚部先端の破片である。火舎は釉がほとんど剥落しているが、部分的に緑釉と白釉が残る。

1は寺域外の東三坊坊間東小路西側溝周辺の包含層出土の三彩碗で、口縁部のみの破片であるが、復原口径は約19cmとなる。口縁部が内彎しながら開く器形で、口縁部外面には二条の沈線を入れる。また、口縁部内面には浅い凹線を施して肥厚部を表出しており、こうした形態上の特徴から佐波理鏡の器形を模したものであることは間違いなく、注目される。外面には緑釉、白釉、褐釉を施し、内面には白釉のみを施す。胴部下半は、ロクロ削りで調整する。軟陶であるが、焼成は極めて堅緻で、一見須恵質の胎土ように見える。

他には、東三坊坊間東小路の東側溝から皿、鉢A、瓶、火舎、八条条間北小路の南側溝から皿、瓶、小壺、十坪の宅地内東辺の南北溝から多口瓶が出土した。これらは主に九・十坪間、十・十五坪間の条坊の側溝から出土したもので、本来は姫寺で使用していたものを寺域外に廃棄したのであろう。

（玉田芳英）



東三坊坊間東小路出土三彩碗（上 1：2） 姫寺講堂出土二彩甕C（下 1：6）